

# 平成30年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

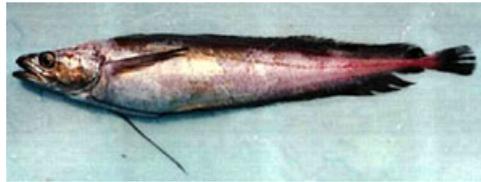
[Top](#) > [資源評価](#) > [平成30年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 イトヒキダラ

学名 *Laemonema longipes*

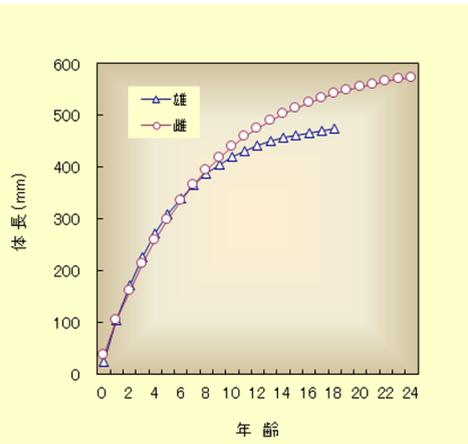
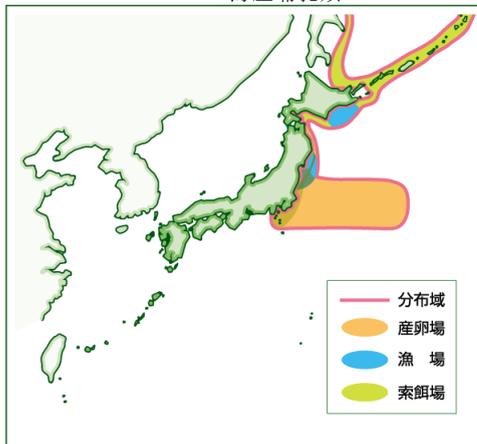
系群名 太平洋系群

担当水研 東北区水産研究所



## 生物学的特性

寿命： 雄18歳、雌24歳程度  
成熟開始年齢： 雄5歳以上、雌7歳以上  
産卵期・産卵場： 2～4月、関東・東北南部沿岸～本州東方の外洋域（黒潮～黒潮統流域）  
食性： オキアミ類やカイアシ類などの甲殻類、ヤムシ類、ハダカイワシ科魚類など  
捕食者： ムネダラなどの大型ソコダラ類やオットセイ、マッコウクジラ、ツチクジラなどの海産哺乳類

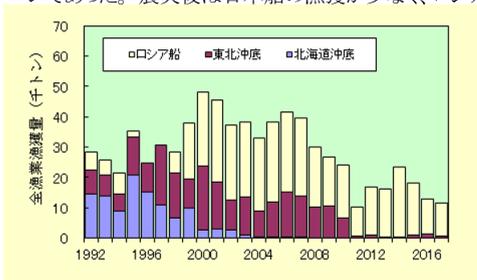


## 漁業の特徴

本種は主に沖合底びき網(沖底)によって漁獲されており、東北海域における漁獲は金華山海区で最も多い。スケトウダラの代替で練り製品の原料として利用されており、漁獲圧はスケトウダラやその他魚類の漁獲状況によって変化する。日本の排他的経済水域内では、ロシアに対して漁獲量が割り当てられている。なお、2011～2017年は東日本大震災(震災)の影響で有漁網数が大きく減少している。

## 漁獲の動向

日本水域内における漁獲量は2000年に4.8万トンでピークを迎えた後減少し、2017年は1.2万トンであった。北海道の沖底による漁獲は1996年以降急激に減少し、2017年は65トンであった。東北海域の沖底による漁獲は震災後激減し、2017年は709トンであった。ロシア船(中層トロール)の漁獲は2008年以降減少傾向にあり、2017年は1.1万トンであった。震災後は日本船の漁獲が少なく、ロシア船の漁獲が90%以上を占めている。



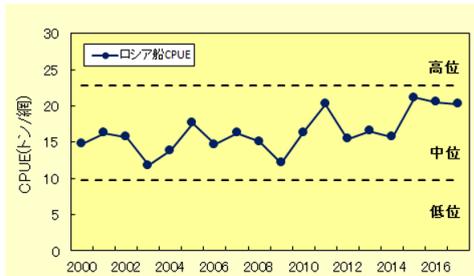
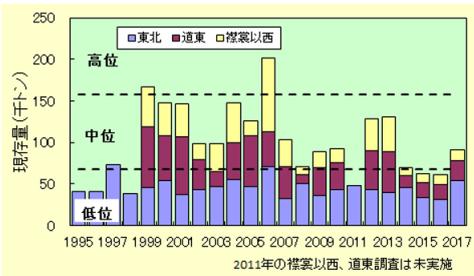
## 資源評価法

着底トロール網を用いて、6～7月に北海道太平洋沿岸で底魚類共同資源調査、10～11月に東北海域で底魚類資源量調査を実施し(2017年の北海道太平洋沿岸では水深350～900mの計18点、東北海域では水深150～900mの計101点)、面積一密度法を用いてイトヒキダラの現存量を推定した。トロール調査による現存量推定値とロシア船の有漁網数あたり漁獲量(CPUE)を資源量指標値として用い、資源の水準および動向を判断した。

## 資源状態

1995～2017年の東北海域の現存量は3.2万～7.3万トンで推移しており、1999～2018年の道東および襟裳西海域の現存量は0.9万～7.2万トン、0.9万～8.9万トンで推移している。2017年の両海域合計の現存量は9.1万トンであった。2000～2017年のロシア船のCPUEは11.8～21.1トン/網で推移しており、2017年は20.2トン/網であった。資源水準は各資源量指標値の平均値の60%未満を低位、140%以上を高位とした。現存量は平均値の80%、ロシア船のCPUEは平均値の124%であり、両指標値ともに中位の範囲内であった。直近5年間(2013～2017年)では、現存量には明確な増減はみられず、ロシア船のCPUEには増加傾向がみられた。両指標値を総合的に判断し、水準は中位、動向は横ばいとした。





### 管理方策

資源は複数年に一度発生する卓越年級によって支えられており、成長が遅く成魚になるまで年数がかかるため、親魚を取り残すことが重要である。親魚量を維持することを管理目標として2019年ABCを算定した。現存量調査結果の体長組成では小型魚がほとんど見られず、本種は小型魚が出現してから漁獲対象になるまで数年を要することから、現在存在する親魚を獲りすぎないように注意することが必要である。

管理基準	Target/Limit	2019年ABC (千トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
0.9・Cave3-yr・1.20	Target	23	—	—
	Limit	29	—	—

- Limitは管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量、Targetは資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ とし、係数 $\alpha$ には標準値0.8を用いた
- ABC算定規則2-1)により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で算定した
- $\delta_1$ には0.9 (中位水準における推奨値)、 $Ct$ にはCave3-yr (2008～2010年における平均漁獲量)を用いた
- $\gamma_1$  (1.20)は、 $\gamma_1 = (1 + k(b/I))$ で計算した
- $k$ は標準値の1.0とし、 $b(14,074)$ と $(71,765)$ はそれぞれ、直近3年間 (2015～2017年)の資源量指標値の傾きと平均値である
- ABCは1,000トン未満で四捨五入した

### 資源評価のまとめ

- 資源の水準および動向は、ロシア船のCPUEと現存量推定値から判断した
- 資源の水準は中位、動向は横ばい

### 管理方策のまとめ

- 親魚量を維持することを管理目標として2019年ABCを算定した
- 現存量調査結果では小型魚がほとんど見られておらず、本種は小型魚が出現してから漁獲対象になるまで数年を要することから、現在存在する親魚を獲りすぎないように注意が必要である

執筆者: 鈴木勇人・成松 庸二・柴田泰宙・森川英祐・時岡 駿・永尾次郎

資源評価は毎年更新されます。